

『命を救ってくれた騎士様に恋をしたら、

甘すぎる愛でどろどろに抱き潰されました』

じゆる♡ちゅっ♡じゅっ……♡

また、あの夢だ。

夜な夜な見る夢。

私はベッドで寝ていて、寝ている自分に何かが愛撫をする。

最初は胸に触られる夢から始まったものが、最近では下の方まで弄られるようになってきた。

「……ふ……っ、う……」

ぬりゅ……♡じゆる……♡

今はゆっくりと花芽を隅々まで舐られている。

ちゅる……♡じゅっ……♡

「ん……、は……っ」

夢にしては快感をはっきり感じる事ができるけれど、起きようと思っても私の目が

開くことはない。

だから誰が、こういったことをしているのかを見たことはない。
ただただ快感を与え続けられる夢。

その夢は、私の身体を弄る者が満足するまで終わることはない。
れろ♡れろ♡ちゅっ♡じゅるるっ……♡

丹念に花芯を舐められ続ける。

ちゅぷ♡ちゅぷ♡ちゅぷ……♡

「ンンっ……、はあっ……」

もうどれほど舐められているのだろう。

絶え間なくじつくりと与え続けられる快感に、私は抗うこともできず、ただ夢の中で喘ぎ声を漏らすことしかできない。

ずぷ……♡

「あんッ！」

ふいに膣口に何かが入る感触があり、舐められる快感がより強くなる。

ずちゅ♡ずちゅ♡ごりゅ♡

中側から擦り上げながら陰核が押し出され、外側では先ほどよりもぷっくりと膨らんだ花芯をしゃぶられる。

「ひゃアっ、んっ、あっ」

ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ♡

「んあああッ！」

外からも中からも激しく擦られ、強い快感に抗えず、私は腰がガクガクと震えるのを感じながら、絶頂した。

ぷしゃっ♡♡

気持ち良いところを責められ続けたナカから、潮が吹き出す。

絶頂を迎えてくたりと脱力していると、快感を与えていた何者かが離れていくのがわかった。

（今日の夢は、これで終わり……）

私はまた深い夢に囚われ、意識を手放した。

朝起きたとき、私は自分の状態を確認して嘔然とする。

淫らな夢を見たとはいえ、肌着も全て脱いだ状態で、全裸で横たわっている自分。

さらには現実でもしっかりと潮吹きをしてしまったようで、ベッドシーツは派手に濡れた形跡があった。

（欲求不満なのかしら？）

悶々としながらも私は急いでベッドシーツを取り替え、朝の支度を終えて仕事へと向

かった。

私は王立魔術院で働いている。

主な仕事は、魔術によって引き起こされたトラブルへの対応だ。

出勤したばかりの私を、魔術院の上司であるオスカーさんが、ちよいちよいと手招きした。

「オスカーさん、どうかしましたか？」

「実は昨晚、夢魔術の使用が検知された」

「夢魔術ですか？」

夢魔術といえば、悪夢やトラウマの治療などに用いられる特殊な魔術だ。

夢という繊細な領域に干渉するため、使用には申請が必要で、基本的には病院など限られた場所でのしか扱われない。

「その夢魔術なんだが、どうやら君の自宅付近から検知されたい。何か変わったことはなかったか？」

「えっ……」

夢魔術と聞いて真っ先に思い浮かんだのは、最近自分の身に起きている異変のことだ。

それに昨日というと、私はひどく淫らな夢を見たばかりでもある。

まさか、あれが夢魔術によるものだったのだろうか。

「た、確かに、変な夢は見ましたが……」

「なるほど。念のため、しばらく君の周辺を見守る人間が必要かもしれないな」

オスカーさんは考え込むように顎へ手を添えると、「また君に連絡する」とだけ言い残し、自分の机へ戻っていった。

（夢魔術……。でも、いったい何のために？）

あの夢は、ただ自分の欲求不満が見せたものではなかったという事実に不安が胸に広

がる。

私は気持ちを切り替えるように小さく息を吐き、トラブル対応に関する書類に視線を落とした。

午前の業務を終えてようやく一息ついた頃。

「今、いいか」

聞き慣れた声に顔を上げると、オスカーさんが立っていた。

「はい、大丈夫です」

「朝の件だが、君の身边を警戒してくれる人材を確保できた」

思っていたよりも随分と早い。私は思わず姿勢を正した。

「もう決まったんですか？」

「ああ。ちょうど手が空いていて、腕も確かな人だ」

そう言うとおスカーさんは、開かれていた扉の方へ視線を向けた。

「入ってくれ」

静かな足音が近づいてくる。

そこに立っていたのは、長身の青年だった。

艶のある黒髪に、鮮やかな青い瞳。騎士団の制服に身を包んでいるから、騎士なのだろう。

整った顔立ちで真面目そうな顔をしている彼は、胸に手を当て、丁寧に一礼した。

「王立騎士団所属、ルシアン・ヴァルフォードです。本日より、あなたの護衛を担当します。よろしくお願いします」

「あ、はい……！ よろしくお願いします。でも、私一人のために騎士様をつけていただいて大丈夫なのでしょうか？」

思わずそう口にすると、オスカーさんが小さく息を吐いた。

「君は、自分が狙われた理由を軽く見すぎだ」

「え？」

「夢魔術は、誰にでも簡単にかけられる術じゃない。対象の精神波長を事前に把握し、深く同調する必要がある。つまり、術者は少なくとも以前から君を観察していた可能性が高い」

背筋がひやりと冷えた。

「観察、って……」

「君自身を狙っている場合、今後直接的な接触を試みってくる可能性もある」

ぞくり、と鳥肌が立つ。

「だから騎士を？」

「ああ。それに魔術トラブルに巻き込まれているのだから、魔術院としての正式な対応でもある」

「分かりました、お心遣い感謝します」

私はぺこりとオスカーさんにお辞儀をする。

「詳しいことは彼から聞いてくれ。私は少し席を外す」

オスカーさんが部屋から出ていくと、私とルシアン様だけがその場に残された。

「本日の夜から、あなたの護衛をさせていただきます。夜間は自宅周辺を警戒し、不審者の接近がないか見張ります」

生真面目な口調で告げられた内容に、驚く。

「夜通しということですか？」

「ええ。夢魔術が使用されるのは夜間である可能性が高いため、その時間帯を重点的に警戒します」

そんなに長い時間、外で見張ってもらうなんて申し訳ない。

「でも、それではルシアン様の負担が大きすぎませんか？」

「護衛任務ですので、お気になさらないでください」

きっぱりと言い切る姿は、いかにも騎士らしい。

それでも申し訳なさは消えず、私は控えめに口を開いた。

「でしたら、せめて休憩くらいは家で取ってください。お茶くらいなら、いつでも用意しますので」

私の提案に、ルシアン様は少しだけ困ったように微笑む。

「お気遣いありがとうございます。しかし、ご婦人の家へ軽々しく立ち入るわけにはま
いりません」

「……そうですね」

正論を返され、私は苦笑するしかなかった。

「もし何か異変を感じたら、すぐに窓からでも私を呼んでください。どのような小さな
ことでも構いません」

「はい。よろしくお願いします」

私は深く頭を下げた。

また仕事が終わったら護衛に来るので待つようにと言われ、私は「わかりました」と
頷いた。

誰が夢魔術を使っているのか、そしてなぜ私を狙うのか。分からないことばかりだけれど、ルシアン様に護衛してもらえることになって不安は少し解消されていた。

仕事が終わわり、私はルシアン様と共に帰路に着いた。

「こちらが私の家です」

王立魔術院から少し離れた住宅街の一角にある、小さな借家。

ルシアン様は周囲を一通り見渡し、門や窓の位置、死角になりそうな場所まで確認していく。

「それでは夜の間、外で警戒を行います。家の明かりは普段どおりで構いません」

「分かりました」

「何かあれば、必ず私を呼んでください」

落ち着いた瞳を向けられ、私は心強く思いながら頷いた。

「はい。よろしくお願いします」

その夜、ルシアン様は家の外で警戒に当たってくれた。

けれど。

その夜もまた、あの夢を見ることになるとは、まだ知る由もなかった。

街が静寂に包まれ、人々が深い眠りへと落ちる頃。

私もまた、ベッドで寝ていたけれど、胸部に違和感を感じて意識が浮上する。

目を開けようとしても、開くことはない。

（また、あの夢だ）

いや、これは夢ではなく、夢魔術なのだ。催眠のようなものだろう。現実を起こっているけれど、私は動くことができないようにされている。

ぬるりとした感触が衣服の下に潜り込み、肌を這う。胸の膨らみの先端を、ぬりゆぬ

りゅと何かに舐められるような感触がある。

「……っ、ふ……」

ざらざらとしたヒダのようなものが乳首を包み込み、様々な角度からカリカリ♡と刺激を与えてくる。

かと思えば、舐め上げ、吸い付くような動きもされる。

ちゅぷ♡ちゅぷ♡ちゅぷ♡

「んんっ、ふああ……」

しこしこしこ♡ちゅぷちゅぷ♡

胸の膨らみを弄られ、たまらず嬌声を上げていると、口の中に何かが入り込んでくる。

太い触手のような感覚に、嫌悪感が湧く。けれど、抵抗しようにも意識とは別に、身体は金縛りにあったかのように全く動かすことができない。

口内に侵入したそれは、先端からどぶどぶと何かを吐き出す。

「んぐ……う……!!」

少しえぐみのあるそれを、吐き出すこともできず、強制的に飲まされる。

その途端、私の胸から伝わる刺激が一段と強いものになる。

(これ、は……催淫剤……?)

ちゅぷちゅぷちゅぷちゅぷ♡

しこしこ、しこしこ♡

「!? やぁぁ……っ!」

両胸の先端を同時に扱かれ、電撃が走ったかのような快感が身体を貫く。

火照り始めた身体が、少しの快感も逃さずにじゅくじゅくに高められていく。

「は……ぁ……ッ」

蜜口に太い何かがずると這い、溢れ出る蜜をじゅこじゅこ♡と擦り付けながら前後に動く。

明らかに人間ではないモノだった。

快感を感じながらも、心は不快感でいっぱいになる。

(このまま犯されるのはイヤ……っ！)

「……っ、ルシ、アン、様あ……っ！」

私は、動かなかった体や口を、全力で動かそうともがきながら大声を出した。

その瞬間、部屋の扉が勢いよく開いた。風を切る鋭い音が聞こえ、私を縛り付けていた何かの気配が消える。

それと同時に、私の身体は自由に動かせるようになっていた。

「ルシアン様……っ！」

「対処が遅れて申し訳ありません……。魔物が気配なく侵入していたようです」

険しい顔をしたルシアン様が、剣を鞘に納めながら言い、私の方をあらためて見て硬直した。

魔物に襲われていた私は、肌着が乱れてひどく淫らな姿になっていた。

しかも媚薬を飲まされたことにより、いまだに身体が疼いてしかたがない。

「お怪我はありませんか？」

ルシアン様はすぐに自分が身に着けていた外套を脱ぎ、私の肌を見ないよう視線を伏せながら、そっと身体を包み込んでくれた。

私はいえ、外套をかけられた刺激にさえ反応し、ビクリとしてしまう。

「ああ、本当にすみません……。怖い思いをさせてしまいましたね」

「ち、違うんです。魔物に催淫剤を飲まされてしまったみたいで……」

火照る身体は全く治まりそうにない。

ぼーっとしてしまう頭で、必死に考える。魔物による催淫剤は、確か膈内で吐精してもらわなければ効果を打ち消せないはず。そして、打ち消せない場合は対象者にとって毒にもなりえ、命さえも奪うのだ。

「す、すみません。ルシアン様に処置をお願いすることは可能でしょうか？」

藁をも縋る思いでルシアン様を見上げる。

「魔術院へ連絡を――」

「魔物による催淫剤は、時間が経過すると毒になります。……はア……、あまり時間の猶予がなく……。お願い、します」

騎士であるルシアン様も、魔物の催淫剤については知っているはず。

ルシアン様は逡巡し、やがて分かりました、と呟く。

「ルシアン様のことを後から訴えたりしませんので……。あと、挿れて、しゃ、射精してもらっただけで大丈夫です……」

「あなたを救うことが、今の私の務めです。あなたの苦痛を少しでも和らげられるよう、できることをします」

囁くように言い、ルシアン様がゆっくりと近づく。

間近で見つめる整った顔立ち。夜のように艶やかな黒髪がさらりと額にかかり、深い青の瞳はまっすぐと私を見つめていた。騎士らしい凛々しさを湛えながらも、その眼差しはどこか優しい。

するりと胸を触られて、私の身体はビクつく。

優しい手つきが柔らかに両胸を揉みしだく。

こすこす……♡

「んっ……ああ……♡」

桃色の頂きを擦られて、じいんと甘い快感が広がる。

ピンっ……ピンっ……♡ カリカリ♡ カリカリ♡

骨ばった人差し指で弾かれたり、引っ搔かれたり。

胸を揉みしだかれ、時に先端をつままれ、私は快楽に顔を歪めながら喘ぐことしかできな

「あひ……ッ、ふああ……♡」

「教えてください……、どうしてほしいですか？」

「下、を、触ってほしいです……っ」

ぐずぐずに溶けた蜜口が、ヒクヒクと肉棒を待ち望んでいるのを感じていた。